障害児デイサービスにおける集団設定保育実践の検討

和　田　幸　子

1．はじめに

・保育実践の只中で新たにされる子ども理解

集団設定保育を実践し省察を行なう場合，子ども一人ひとりがいかに充実していたか，ということと，みんなで一緒に居ることの喜びをいかに感じることができたか，という2点が大切な視点となる。保育実践者は，「一人ひとり」と「みんな」を考慮しながら実践を進め，省察する。

障害児保育においては，それぞれの子どもが個性的であり，保育者は「一人ひとり」を理解すること，対応することにまず直面する。障害のある子どもの保育集団では，子どもを理解しようとするまなざし，つまり「子どもを見ること」と，子どもの育ちに向けての願いを持ち具体的な手だてを試みる「保育行為」と，さらには活動の成り行きを「見取ること」が，複雑に交錯しあっていく。この複雑さゆえに，障害児保育において集団設定保育を行うことは困難なこととされる。しかし一人ひとりの子どもへの願いを確認しながら集団設定保育を試み続けたい。子どもは皆と共に居ることによって，自分もしてみたいという動機が生じ，他者に伝えまた上手く伝えられない葛藤を経験する。保育者はそれを読み取り，そこからいかにして育ちの芽を伸ばす援助をすることができるかと具体的に考える中で子ども理解を深めていくからである。そのことを目指す集団設定保育のあり方を考えたい。

永倉みゆきは自らの保育実践記録を振り返り，保育者には「行為しながら感じ取り・感じ取りながら行為する」と表現するような体感に近い感覚があるとし，保育者として子どもを「見る」ことは，「保育行為すること」に深く関わっていると述べた。D. ショーンの提示した概念「行為の中の省察」に依拠し，保育は子どもとの応答的な行為によって進められる活動であるため，保育実践の中で子どもの行為を「見て」とり，「行為」にして応じる中で既に「行為の

中の省察」が行なわれていると述べたのである[1]。つまり保育者は言葉によって捉える以前に，子どもとの応答的な行為によって子ども理解を新たにしていると言えるだろう。

以上のことは保育実践の只中で行なわれている。いわば保育者は心身を熱くしながら感じ取ろうとしているのである。一方，一日の保育を終えた時，体の温みを残したまま振り返って省察する。さらには時を経て振り返る。保護者の思いを聞き取ることや，他の保育者との話し合いをすることは，さらに省察を深めるきっかけとなる。このような機会を重ね，保育実践の只中で一旦身体で感じた子ども理解を言語化していく。

・先行研究について

障害児保育における事例研究は前述の2点のうち「一人ひとり」に視点を置いたものが多い。例えば宇田川久美子は幼稚園フリー教員の立場での，障害のある子どもとの関わりと子どもの育ちを記述し省察している。自閉傾向のある子どもがする独特な行為を同じように真似てみる中で，その子が宇田川という他者の存在に気づき共感するに至った事例[2]，宇田川の関わりと同時に他児達の関わりによってその子が変容していった詳細な事例の省察[3]である。これらの事例を通して宇田川の子ども理解の転換と深まりが見られる。同時に，クラス担任が進めようとしている保育の流れを乱さないようにその子と関わるフリー教員としての葛藤を読み取ることもできる。そこで「みんな」にも視点をあてた集団設定保育の中で「一人ひとり」の子ども理解を深めるような実践事例とその省察の出現が望まれるのである。

筆者はこれまでに集団設定保育の実践者として行なった音楽あそびの1～2年間の経過記述とその省察を試みてきた。いずれもある一人の子どもに焦点を当てた省察であった[4][5]。集団設定保育の中でこの子どもがいかに充実しているのか，いかに保育者がこの子どもの理解を深めていくのかを振り返ったのであった。

集団設定保育の中で，個々の子どもを見ること，保育行為を工夫して続けて行なっていくこと，見取ることが同時に進行していく。これらがどのようになされていくのかを明らかにすることが，障害児保育での集団設定保育を進める上で求められていくであろう。

・本稿の目的

保育者は保育実践を行なうに際して工夫を重ねる。実践の只中では，複数の子ども達が活動し刻々と変わっていく状況の中で一人ひとりの子どもの状態をよく見て，ある判断をし，保育行為をするのである。その時，一人ひとりの子どもが生き生きと活動できるようになったか，そうではない子どもが居たのではないか，他の方法があったのではないかと保育者は葛藤する。そこで集団設定保育の中で何が生起し，子どもの育ちにとって影響を与えることになっていくのかを実践者の立場で振り返ることが必要となるであろう。

本稿では，障害のある子ども達が通うデイサービスでの集団設定保育を，保育実践記録を通して振り返る。本保育実践の実践者は筆者であり，複数の子どもとその親，複数の保育者がこの保育の場の当事者となっていた。本稿の目的は，障害のある子どもの育ちを支えるための集団設定保育実践のあり方についての視点を提示することである。

2．本保育実践について

K園保育室において，2012年2月14日10：00から11：05の約1時間行なわれた設定保育である。

当園では，障害のある子が通うデイサービス事業を行なっている。主に2才児，3才児の計20人が通っている。「共に生きる保育」を目指し，その具体的なあり方を探りたいという願いを持ち保育実践に取り組んでいる。その一環として2005年度より毎年1度または2度，音楽あそび，わらべうた遊びを親子参加の保育で行なうために筆者を講師として招いてくださってきた。筆者の当園での保育実践は当日が9回目だった。

当日，筆者は玄関で子ども達の登園を迎え，保育室での各自のお支度を共にした後，自由遊びの場に参加した。そして10：00より普段と同じように行なわれた朝の集まりに参加した後，筆者が設定保育を担当するという流れですすんだ。設定保育を終えた後，子ども達は保育室で過ごし，昼食をとっていた。その間別室で「保護者懇談会」を行なった。

また，子どもと母親が降園後，「保育者懇談会」を行なった。「保育者懇談会」は，本保育実践に参加した7人の保育者（非常勤保育者も含む），施設長，学生実習生と筆者の計10人で行なわれた。まず，施設長が，「保護者懇談会」の様子を伝え，その後保育者が順に，本実践を振り返って語った。

筆者は「保護者懇談会」「保育者懇談会」においてはメモを記しながら聞い

た。また，帰宅後その日のうちに，本保育実践の記録を記した。本稿は，これらのメモと記録をもとに進める。

3．方　法

①本保育実践の記録を「保育者が行なった手だて」「子ども・母親の姿」の項目にわけて，時間の経過とともに記す。さらに保育実践中，気づいていたことを「検討事項」として記す。
②「検討事項」について省察する。その際，「保護者懇談会」，「保育者懇談会」での話題ももとにする。
③障害児保育における集団設定保育実践のあり方の視点を提示する。

4．本保育実践記録

記録は「時間」「保育者が行なった手だて」「子ども・母親の姿」「検討事項」という項目に分けた表を作り，記入する。本保育実践は保育者が先導して行なった設定保育ではあるが，子どもが自ら興味を向け表現するようになることを望んでいた。本設定保育の実践者である筆者は，意図を持ち，それに向けての配慮を行なおうとしながらすすめた。それゆえ，本保育実践記録では「保育者が行なった手だて」に対して子どもや母親がどのようであったかを記す。「検討事項」は，筆者が保育実践中に気づいたことである。筆者はこれらの気づきに関して，実践を行ないながらその意味を探ろうとしていた。

2012年２月14日火曜日　天候：雨のち曇り			
本保育実践の対象：K園在園児14人・保護者11人・保育実践者（筆者）・保育者7人・施設長・実習生１人			
テーマ：音楽あそびを楽しむ			
時刻	**保育者が行なった手だて**	**子ども・母親の姿**	**検討事項**
	（＊はH保育者が行なった手だてを記す）		
	＊朝の集まりの準備をしようと声かけをする。	・プラレール、ままごと用具を箱に入れる。	
10:00	＊CDをかけて〈だいすきツイスト〉体操を始める。	・輪の隊形で体操をする。	
	＊絵カードを指差しながら、次は歌を歌うことを知らせる。	・絵カードの方を見ている。	
	＊歌〈手をたたきましょう〉を歌う。	・手拍子でリズムを取っている。	
	＊絵カードを指差しながら、次は名前を呼ぶことを知らせる。一人ずつ名前を呼ぶ。	・呼ばれて手を挙げる子、「はーい」と言いながら中央に出てくる子、母親の膝に顔をうずめる子などいる。	
	＊「和田先生が来ています」と筆者を紹介する。	・筆者の方を向く子がいる。	
	（以下・は筆者が行なった手だてを記す）		
10:10	・ゆっくり手拍子を繰り返し、そのまま続けて〈たんたんたんぽぽ〉に合せて手拍子し、頬に触れる。５回繰り返してする。	・手拍子を続けてしていたが、頬を触ることにも気づきだす。	・筆者には、子ども達は概ね参加しているように見えていた。 **（検-全-1）**
	・手を目尻にあて、〈あがりめさがりめ〉を歌いながら目尻を上に、下に引っぱり、上に引っぱった状態で見合う。	・目尻を触っている子、母親に触ってもらう子がいる。目尻を引っぱった状態で筆者の方を見る子がいる。	
	・前後に〈ぎっちらこ〉と歌いながら揺れる。	・母親の膝にのせてもらい前後に揺らしてもらう。	
	・「切符代100円です。がちゃっ」とお金を入れる動作をする。〈ろめんでんしゃ〉を歌いながら膝を上下に揺らす。歌のおわりで膝を開く。続けてする時も「がちゃっ」と切符代を入れるようにして歌い始める。	・「がちゃっ」という声にあわせてお金を入れる手つきを真似ている。母親の膝の上での上下の揺れを喜び声も出ている。歌の最後に開いた膝の間にすとんと落としてもらい笑う。「もっと」「もう一回」の声が聞こえる。筆者の前に来て人さし指をたててもう一回したいことを表している子もいる。母親は笑っている。	・「もっと」「もう一回」という声が筆者の近くにいた子ども達から発せられたことから、筆者は参加度が高いと感じていた。 **（検-全-2）**

	・小篭から綿をひとつまみとり出す。	・綿をつまむ筆者の手つきをじっと見ている子どもがいる。子どもは小篭に近づき、綿をとる。母親は他の子が綿を取れるように、小篭を順番に回す。	
	・綿を掌の上にのせてさわりながら〈たんぽぽたんぽぽ〉を歌う。歌の終わりで息を吹いて綿をとばす。繰り返して遊ぶ。	・綿に口を近づけ、唇を尖らせてふうと吹く。とんでいった綿を取りにいき、元の場所に戻ってから再び吹く。	
	・「綿戻ってきてね」と言い、小篭に綿を入れる。	・小篭に綿を入れる。	
10:18	・中央で巾着袋をあける。中からリボン棒を1本出す。	・巾着袋に近づき中をのぞく。手をいれてリボン棒をとり、親の元に戻る。リボン棒を手にして小刻みに振ったり床を触る。	・座って様子を伺っているC男に、c実習生が「見に行こうか」と声をかけて立ち上がった。C男はついていき、c実習生に広げてもらった巾着袋に手を入れてリボン棒をとることができた。リボン棒を手にしたC男は小走りで母親の元に戻った。 (検-C-1)
	・CD〈身代わりジジ〉を再生してもらう。リボン棒で空間に大きく描くように腕を動かしてなびかせたり、床を触っていく。	・母親の側でリボン棒を持った手を上に伸ばしたり、左右に広げたりする。その場をくるくる回る子もいる。	
	・巾着袋にリボン棒を入れる。	・巾着袋にリボン棒を入れる。母親が使っていたリボン棒を入れる子もいる。	
10:23	・タンバリンを鳴らし〈だるまさんがころんだ〉ととなえながら走る。となえが止まるとタンバリンを止め、動きも止める。8回繰り返す。	・母親や保育者と手をつないで走る、止まるを繰り返す。止まると笑い出す子がいる。	・歩けないB子はb保育者に立ち姿勢を支えてもらって参加した。(検-B-1)
	・「いち、に、さん」とその場を3回跳ぶことを繰り返す。	・同じように跳ぶ子が増えてくる。次第に輪の隊形になってくる。	
	・その場で隣の子と手をつないで輪の隊形になる。〈まめがらがらがら〉を歌っては、一斉に時計回りに回る。5回繰り返す。	・母親は隣の子どもと手をつなぎ、時計回りに回る。回る時に子どもの歓声が上がる。	・A男はa保育者と手をつないで回るが、どちらかというと引きずられているような動きだった。 (検-A-1)

	・中腰姿勢になり〈ずくぼんじょ〉と歌いながら両手で頭をトントンと触る。	・頭を触る動作を真似する。	
		・A男がぐずりだした。	・〈ずくぼんじょ〉の遊びに変わってからすぐにA男がぐずりだした。(検-A-2)
	・両手を挙げての背伸びの姿勢から、跳びはねて順に姿勢を低くしていく〈つくしはつんつん〉の遊びをする。	・両手を懸命に上にあげて伸びようとしている子がいる。	泣いているA男の横でa保育者は声をかけているが困った様子。筆者は様子を見ながらも遊びを続けた。(検-A-3)
		・A男はこの間ずっと機嫌が悪い。	・施設長がA男と手をつなぎ「もっとしたかったんだね」と言っているのが聞こえた。筆者は「何を」したかったのかは聞き返さず〈まめがらがらがら〉のことではないかと予測解釈して、再び歌ってみようと考えた。(検-A-4)
	・〈まめがらがらがら〉と歌いながらその場をぴょんぴょん跳ぶ。A男がさっと笑顔になったので、そのまま時計回りに進みこの遊びを続けた。	A男はぐずぐず言うのを辞め、皆と一緒にその場を跳ぶ。時計回りにまわって笑っている。	・筆者はその場を跳びながらA男の様子を見ていた。A男がもっとしたかったのは、この〈まめがらがらがら〉の遊びだったのだろうと考えた。(検-A-5)
10:30	・中央で布袋をあける。プレイクロスを出す。一枚頭にかぶせ、子どもの様子を透かして見る。	・D子、K子、H美が布袋に手を入れてプレイクロスを引っぱりだした。プレイクロスをかぶった筆者と目が合うとじっと見つめている。C男はじっとして筆者を見ている。	・c実習生はプレイクロスをC男の頭にかぶせた。C男はプレイクロスをかぶりじっと見ていた。(検-C-2)
	・プレイクロスを頭にかぶり〈ずくぼんじょ〉を歌いながら頭を軽くトントンと叩く。半透明なので近くにいる子どもの顔を見つめながらする。	・筆者に見つめられた子は目をそらさず見ている。プレイクロスをはずすとはっとした表情になる。	
	・立って〈ちゅちゅこっこ〉や〈うえからしたから〉を歌いながらプレイクロスを上下にふり、手を放して飛ばす。	・立ってプレイクロスを振る。	・C男は座ってプレイクロスを手で触っている。(検-C-3)

	・座ってくにぎりぱっちり〉を歌いながら両手でプレイクロスをさわり小さく丸める。合わせた両手の中に握りこんでしまってから、両手を弛め、プレイクロスが出てくるのを見る。	・プレイクロスを両手で包み込もうとしたり、両手の間から出てきたプレイクロスを母親に見てもらったりしている。	・D子はプレイクロスを両手でくしゃくしゃと丸めるが、手を硬く握ったまま止めている。母親がする手つきを見ていたD子はついに握った手をゆるめることができた。D子は自分の手の中からプレイクロスが広がるのを声をあげて喜んだ。 (検-D)
	・中央で紙袋からトイレットペーパー芯を取り出す。口に当てて声を出す。目にあてて子どもの方を見る。	・トイレットペーパー芯を取る。真似て口に当てて同じように声を出している。声が行き交う。目に当てて見ている子もいる。	・筆者はB子のところにいき、芯に口を当てて「B子ちゃーん」と呼んだ。 (検-B-2)
	・シール、カッティングシートの入った箱を中央に置く。セロハン、輪ゴムの入った箱も置いた。芯にシールを貼りセロハンで一方の穴を覆ってカズーに仕上げた。カズーで声を震わせながら歩く。子どもがシールを貼ったりセロハンをあてる作業を手伝っては、口に当てて声を震わせて歩く。	・声を出すのをやめ、中央の箱を見に来る。シールをとって母親の元に戻り手にしたトイレットペーパー芯に貼っている。カッティングシートはそのまま芯にのせて貼ろうとしているが、保育者にシートをはがしてもらってシール状にして貼っている。セロハンを取り、母親や保育者に手伝ってもらいながらカズーに仕上げた。	・筆者はシートからはがしたカッティングシートをB子の指先につけた。B子はb保育者に手伝ってもらって芯に貼った。 (検-B-3)
	・カズーを口に当てて天井に向かって声を出す。	・立ってカズーを口に当てて声を出している。筆者の声に応えるように声を出して、声の応答を繰り返す。	・E男はシールをたくさんとってきて床に置き、芯に一つずつ貼っていった。e保育者が見守っている。 (検-E-1)
	・オカリナで〈かわいいかくれんぼ〉の旋律を2回吹く。	・母親は歌っている。子どもは筆者の方を見ている。	・E男はシールを貼り続けている。 (検-E-2)
11:00	・指人形を一つずつ出して指につける。5本の指につけてから、指人形の頭を順に押さえながら〈どっちどっち〉を歌う。	・歌の間は見上げてじっと見ている。歌が終わると「ばいばい」と手を振って指人形を見送る。筆者の間近まできて見ている子が4人いる。	・E男はシールを貼った芯を緑色のセロハンでくるみ、もう一枚のセロハンを輪ゴムでとめてカズーに仕上げた。 (検-E-3)

5．検討事項について

保護者懇談会，保育者懇談会で語られたエピソードから，筆者は「検討事項」を読み解く糸口をみつけることがあった。これは子ども理解の見直しとなった。

そこで本節では，筆者の気づきである検討事項についてその詳細を記すⅰ)。その上で保護者懇談会ⅱ-1)，保育者懇談会ⅱ-2)で語られたエピソードを記す。それらを踏まえて「検討事項の省察」を行なうⅲ)。

①A男についての検討事項

ⅰ）保育実践記録の検討事項欄（検-A-1,2,3,4,5）の出来事について

皆で丸くなり隣の人とつないだ手を前後に振り〈まめがらがらがら〉を歌っては一斉に時計回りに駆けていくことを繰り返す遊びでの出来事である。筆者の右方でA男はa保育者に手をつないでもらい参加していた。a保育者のリードのまま，リズムを取っては駆ける，という動きの流れに入っているようだった。

〈まめがらがらがら〉から〈ずくぼんじょ〉の遊びに変わるとA男はぐずりだし，地団駄を踏んでその場に座り込んだ。A男の不機嫌な泣き声が保育室中に響いていた。a保育者はA男の傍らで困った様子だった。筆者は何があったのか，A男が〈ずくぼんじょ〉や〈つくしはつんつん〉の遊びを拒むのはなぜだろうかと考えながらも，歌って遊びを続けていた。そんな時，A男をなだめていた施設長の「もっとしたかったんだね」という声が聞こえた。「何を」したかったのか筆者は定かではなかったが，おそらく〈まめがらがらがら〉ではないかと考えた。その間筆者はその場で3回両足跳びをすることを繰り返した。真似て跳ぶ子どもが増えてきた。そこで筆者は手を前後に振って〈まめがらがらがら〉を歌い始めた。

A男はa保育者，施設長と手をつないで時計回りに駆けた。笑っていた。

ⅱ—1）保護者懇談会でのエピソード

A男の母親は不参加だったためなし。

ⅱ—2）保育者懇談会で語られたエピソード

以下にa保育者が語ったことを記す。

A男なりの楽しみようがあると感じた。A男は保育者が感じている以上に楽しんでいたんだと気づかされた。保育者に引きずられるような参加で，喜んでいるようには見えなかったのに，大人が見ている以上に子どもは多様な方法で感じて喜んでいたのだと知った。A男がぐずってもっとしたいと訴えた時，そのことがわかった。

ⅲ）A男についての検討事項の省察

母親が不参加だったA男をa保育者は気遣っていた。a保育者はつないだ手の感触，足どりによってA男の感じ方を読み取っていたと思われる。それは，遊びには参加しているが，保育者が引きずっているようでA男が心底楽しんでいるようには思えないというものだった。それゆえA男が意思を訴えるかのようにぐずる姿を前にして，その意思をさぐり対応することに戸惑ったのだろう。この間，筆者は遊びを停止させてはならないと懸命に歌い続けていた。そして施設長がA男の言葉を聞き上げ，筆者もそれを受けて咄嗟にその場で跳んだことをきっかけに，A男は参加していく。

この出来事の終始，a保育者は戸惑いながらもA男がどのように感じているのか，理解しようとしていたと考える。a保育者は決してA男に言い聞かせるのではなかった。泣き続けるA男の側に居続けた。筆者は，このようなA男とa保育者，途中から援助に入った施設長との関わりを見ながら，皆に向けて設定保育を導いていた。つまり，A男にも再び参加してほしいという願いを持ち，跳んでリズムを生じさせていた。そのような中で，A男自らが皆の遊びに参加していったのである。

この事例中のように，大泣きの声が皆に与える影響は大きい。保育者は自らを責められているような思いに陥りそうになる。しかしこの時a保育者は，泣き叫ぶA男の側に居て理解しようと努めていた。それゆえに，筆者は思い切って保育実践を続けた。A男にすれば気持ちを受け止めてもらいつつも，保育現象は動いていたのである。そんな中で，A男自らが気持ちを切り替えて新たな活動へと踏み出していったと考える。

②B子についての検討事項

ⅰ）保育実践記録の検討事項欄（検-B-1,2,3）の出来事について

座位のB子は，横に居る母親，b保育者に度々声かけをしてもらっていた。B子もそれに答え，よくしゃべっているようだった。〈だるまさんがころんだ〉と唱えて走る遊びでは，B子はb保育者に立位姿勢を支えてもらい参加して

いた。

母親，b保育者は姿勢を低くして座位のB子の傍らに居た。3人が常に一緒に居るように見えた。筆者は歌い，皆に素材を提示しながら遊びを進めていたのだが，筆者からB子への直接的な関わりは明らかに不十分だった。当保育実践の終盤，筆者はカズー作り[註]の材料のトイレットペーパー芯をマイクのように口に当て声遊びをしながらB子の側に行った。そしてB子の指にカッティングシートをつけた。B子はb保育者にトイレットペーパー芯に指を押し付けるようにしてもらいカッティングシートを貼った。

ii—1）保護者懇談会で語られたエピソード

B子と母親は前回（2011年2月）にも筆者が行なった集団設定保育に参加している。2回の経験からB子の母親は以下のように語った。

B子は身体障害があり視界が狭いので，遠くでしていることがわかりにくい。目の前でしていることは理解できる。B子にはできないことが多いけれども同じようにやらせたい。だから「これから～をはじめますよ」と仕切って進めてもらったらB子にも分かりやすかったと思う。

本保育実践の進め方，B子への関わりに対して満足していない母親の思いを筆者は読み取った。筆者は保護者懇談の後，母親に辛い思いをさせる結果になってしまったことを詫びた。

ii—2）保育者懇談会で語られたエピソード

B子と共に参加したb保育者の語りを以下に記す。

例えば，手具を巾着袋から出していると，近くに子ども達が自然に集まって，気がつけば皆の遊びが始まり一緒に遊んでいる，というのが和田先生の仕方だった。ここには保育者の意思があると感じられた。私達保育者は日ごろ子ども達に，はじめます，聞きましょう，集まりましょう，これを見ましょう，と言って説明しがちで，保育者が言葉で引っぱりすぎているのではないかと反省した。保育者先導でなくて，子どもが興味を持って自ら参加する姿が今日はあった。

けれども，B子には保育者が知らせてあげなければならなかった。B子は自分から見に行くことができないから，B子の側にいた保育者の私が援助しなければならなかった。その援助について，私は不十分だった。

筆者はｂ保育者の語りを受けて次のように応えてしまった。

一人ひとりの充実を願いながらみんなですることに意味を見出していけるような保育を目指したいが，実際には，複数の子どものそれぞれの状況を見てふさわしく関わりながら皆ですることを進めていくことは簡単なことではない。複数の保育者が保育の場に居るので助け合い，補いながら進められたらいいと思う。

これを聞いた他の保育者の意見を記す。

自然に流れるように進んでいく設定保育の場に子どもが居ることと，活動の切れ目のはっきりと仕切った保育を体験すること，そのどちらも子どもが体験したらいいのではないか。Ｂ子にふさわしいのはこちらの仕方だ，と決めてしまわなくてもよいのでは。

ⅲ）Ｂ子についての検討事項の省察

動いて活動する子ども達の中で，Ｂ子と母親，ｂ保育者の３人が姿勢を低くして一緒に居た。気づかう母親とｂ保育者，それに対してＢ子が話して応え，３人で完結しているように筆者には見えていたのだった。そんなＢ子に近づくタイミングを，筆者は皆への保育を進めながら探っていた。そしてカズー作りの時にようやく積極的な関わりをした。トイレットペーパー芯を通した声をＢ子に向けて発するという仕方だった。

当保育実践を担当した筆者は，一人ひとりを見ながら皆を見ることを努めていた。Ｂ子への配慮が足りなかったということではなく，皆を見ながらＢ子に関わる具体的な手だてとそのタイミングをつかめずにいた。それができたのは終盤になってからだった。

仕切って進めてもらったらＢ子にも分かりやすかったという母親の言葉は，筆者の保育実践の進め方に対して改善を求めているように聞こえる。しかしそこに，Ｂ子に十分に気配りをしてもらったという実感が持てなかった母親の辛さを筆者は読み取るのである。それは，身体障害のあるＢ子とその歩みに同伴する母親がこれまで負ってきた辛さであり，これからも負い続けなければならないのかという問いかけを筆者らにしたのではないかと考える。Ｂ子のことを「できないことが多い」けれど「理解できる」と見ている母親の思いに寄り添う保育実践のあり方を探らなければならないのである。母親の言う「理解」は，Ｂ子もあらゆる感覚を用いてたくさんのことを感じている，という意味であり，併せてＢ子の感覚を呼び覚ます機会を得たいという期待が込められて

いる。つまり，そのようなB子への関わりを母親は筆者に期待していたのではないだろうか。

保育者懇談会では他の保育者に補ってもらえたらと話してしまった筆者であったが，そうではなく，B子の母親は筆者からのアプローチを期待していたのである。それでは筆者にできたことは何であろうか。B子が聞くこと，見ること，触れて肌触りや体温を感じること，風を感じること，とあらゆる方法でB子自身の感覚を開く方法を探し試みることだったろうと考える。

③C男についての検討事項

ⅰ）保育実践記録の検討事項欄（検-C-1,2,3）の出来事について

リボン棒を振る筆者の側で自分もしてみたいと手を伸ばす子ども達とは様子が違い，C男は座って筆者のすることをじっと見ていた。筆者と顔を合わせるのだが，そのことで様子が変わるのでもなかった。

実習4日目のc実習生は，子ども達と関わるきっかけがつかめず，保育室での身の処し方に困っていた。表情をほぐすことを心がけること，一人の子どもに焦点を当ててその子に関わることからはじめようと実習担当保育者に言われたところであり，この日はC男と関わることになっていた。

後方からC男の様子をしばらく見ていたc実習生は，C男の横に座りなおし，声をかけ立ち上がった。C男はc実習生についていった。c実習生は巾着袋の口を開けC男に見えるように向けた。手を伸ばしてリボン棒を取ることができたC男は嬉しそうに母親の元で振りはじめた。c実習生も子ども達と同じようにリボン棒を振っていた。

その後も，プレイクロスを使ってc実習生はC男に関わろうとした。

ⅱ—1）保護者懇談会で語られたエピソード

C男の母親は以下のように語った。

初めの方はリボン棒を振って踊っていたが，途中動きが止まってしまった。同じようにできないと動けなくなるんです。

ⅱ—2）保育者懇談会で語られたエピソード

保育者懇談会では，保護者懇談会に参加した施設長より，上記のように母親が語ったという報告があった。本事例では，はじめC男は皆がする様子をじっと見ながらも，自ら動き出すことができないでいた。c実習生の後を追い，

少しずつ動き出していたのだった。保育者達はここにはC男の心の動きがあると見守っていた。つまりC男が自ら動き出した過程に意味があると考えていた。

しかし，母親は少しずつC男が動いてみたことではなく，動きが止まってしまったことに着目していた。このように保育者と保護者には，子どものどの姿を捉えるのか，またどのように捉えるのかの相違がある。

それを踏まえて，施設長は以下のように語った。

お母さんはC男が活発に活動しないことに物足りなさを感じているが，今日はc実習生がC男に寄り添い無理なく誘いかけてくれたことで，C男は踏み出すことができたと思う。c実習生のC男への関わりが良かったと思う。

c実習生は「ありがとうございます」と応えていた。

iii）C男についての検討事項の省察

まず，C男が自ら動き出したことに意味を見出そうとする保育者と，まだまだ不十分だと捉える母親の，その着目する姿に差違があることを知っておきたい。

C男についての検討事項を解く2つ目の視点は，c実習生についてである。子どもと関わるきっかけを見いだせなかったc実習生は，保育の場に居る居心地の悪さに悩んでいた。c実習生は，C男の傍らに居て，C男に寄り添おうとし，動き出せないC男の様子を見て，自らが動いてみることを始めた。それはC男への誘いかけとなった。C男は応える形で動き出した。リボン棒やプレイクロスといった手具を手にすることによって，C男は気持ちが揺り動かされたのだった。施設長の語りによって，c実習生は自身の存在がC男の助けとなったことを知った。ここで，自信喪失になりかけていたc実習生を保育実践の中で支え生かそうとする施設長の意思を筆者は見出す。

④D子についての検討事項

i）保育実践記録の検討事項欄（検-D）の出来事について

D子はプレイクロス遊びを女児2人の側でしていた。筆者にはD子を含んだ3人が一緒に両手でプレイクロスを触り楽しんでいるように見えていた。よく見ると，D子は握り込んだプレイクロスをそのまま握り続けている。横で母親はプレイクロスを握った手を弛めて見せた。母親の手の中からプレイクロス

がふくらんで出てきたのを見たD子は，握り込んだ両手をそっと弛めた。自分の両手の中からプレイクロスが勢いよく出てきたとき，D子は声をあげて喜んだ。

ii—1）保護者懇談会で語られたエピソード

前回（2011年2月）も居たので今日（筆者の保育実践）は2回目。今日は，歌の強弱を意識して手で丸め，そして合わせた手を弛めることができた。硬く握り続けるばかりだったが，弛めるということがどういうことかわかった。D子にとって発見だったようだ。

ii—2）保育者懇談会で語られたエピソード

施設長より上記の語りの報告を聞き，保育者から出た言葉を記す。

そんな風に感じるようになったんだね。

iii）D子についての検討事項の省察

力を弛めることを知ったD子のその体験を，いとおしいものとして語る母親の姿を確かめ合えた。小さな体験であるが，D子と，D子に添う母親には意味ある出来事であった。D子ははじめ両手の中にプレイクロスを入れて握り続けていた。このときは母親の手つきを見て，見えているように真似ていたと思われる。母親のすることをD子の身体から見えているように真似たのだと考える。それに対して，次に手を弛めたときには，母親がしているように，つまりD子は母親と身を重ねたようにしたのではないだろうか。両手を合わせている手の形ではあるが，そこから力を弛めようとする母親と同じ身体感覚を経験したのではないかと考える。D子が「見えているようにする」ことから，D子が「母親がしているようにする」こと，つまり自らの身体を母親の身に重ね合わせてしてみるという転換があった。これは通じ合えたという喜びとして母親には自覚された。ゆっくりであるが，このような人との通じ合いを経験しながら育ってほしいという願いが新たに沸いてくる。

⑤E男についての検討事項

i）保育実践記録の検討事項欄（検-E-1,2,）の出来事について

たくさんのシールを前においているE男には，貼り続ける意思が感じられた。他の子ども達が仕上げて声遊びを始め，また筆者がオカリナを吹きだして

も，E男は黙々と貼っていた。そして，貼ったシールが透けて見えるように芯を緑色のセロハンでくるりと包み，もう一枚で穴を覆ってカズーに仕上げた。ユニークな出来上がりだった。筆者は思わず声をあげた。E男の側で見守っていたe保育者は嬉しそうに，緑を2枚使いましたよ，と応えた。このようにE男のカズー作りへの参加は個性的なものだった。E男は満足しているようだった。E男の存在が充実するひとときを持てたことに筆者も納得した。

ii—1）保護者懇談会で語られたエピソード

母親は感想を次のように語った。

今日はシール貼りだけ出来た。

ii—2）保育者懇談会で語られたエピソード

保護者懇談会での母親の言葉について，報告で聞いた保育者達は，思わず「他の事もしていたのにね」と口にした。実際，シール貼りしかしていなかったのではない。またカズーのユニークな出来を筆者らは評価していた。しかし母親の捉え方は違ったのであった。施設長は以下のように語った。

E男が他の活動もしたか，していないかが問題なのではなく，「シール貼りだけ出来た」とお母さんが捉えているということを，保育者は受け止めないといけないと思うのです。

iii）E男についての検討事項の省察

E男のカズー作りの仕方は彼なりのイメージがあるようで個性的だった。個性的であればあるほど，他者はそこに関わることが難しくなるのであるが，皆の見守りの中でE男の活動は尊重された。E男がやり遂げることができた時，充実感がお互いにあったといえる。しかしそのまま母親に伝えたのでは，保育者の感じ方の押し付けになってしまう。

母親はE男の充実感には気づいていたと考える。カズー作りはできたのだ。だからこそ，他の活動でも生き生きと参加してほしいと願ったのだろう。母親はそのための援助がいまだできないでいると自覚しており，その寂しさと不安を感じているのではないだろうか。保育者にはE男の今のありようを受け止めることと，さらなる願いに向けて関わり続けていくことが求められる。

6．全体的省察

本保育実践は，筆者がK園を訪ねて行なった実践であり，半数以上が初めて出会った子どもであった。子ども達は筆者のことを親しい人と感じてくれるだろうか，と探りながらの保育実践であった。(検一全一1,2) で記したように，筆者は参加度が高いと感じたので，ひとまず安心し保育実践を続けた。しかしその実態は足並みが揃った状態ではなく，子どもそれぞれの姿があった。筆者は保育実践中に気づいたことを，保育をすすめながらも考えていた。本保育実践の特徴は，困ったこと，気になる事柄が生じても，実践を止めることなく続けたということであろう。気づいたことを心に留めながらも保育実践をすすめたのであった。見逃すことではなく，保育実践の中でそのことの意味を見出していこうとしたのであり，子どもを理解しようと努め，新たな願いを抱く過程であった。

本保育実践から浮かび上がってきた，子どもの育ちを支えるための障害児保育実践のあり方についての視点を以下に挙げる。

・思い切ってしてみる

ぐずるA男を見ながら，筆者はその場で跳びながら前にした遊びをもう一度やってみようかと考えていた。跳ぶ動きに魅かれて集まってきた子ども達の後押しを受けたように，思い切って判断し，してみたのであった。C男の事例においては，c実習生は動けないでいるC男を見て，自ら動いてみることを試みた。保育の場での身の処し方がわからなくなっていたc実習生にとっては，思い切ってやってみようと決意して行なったことだったと考える。このように保育実践の只中で起こる出来事をその場に居て解釈し，瞬時に判断をし，思い切ってしてみる。そのことによって子どもが気持ちを替え参加できることがあるといえる。

・リズムを共感する

筆者は「仕切って進める」ことを，敢えて行なわなかった。このことによってB子の母親に辛い思いをさせる結果となってしまった。しかし筆者が問うべきことは，進め方ではなく，B子への配慮が最善であったかということなのである。

b保育者の語りにもあったように，言葉がけによって遊びの展開と維持が保

たれるような実践への疑念を筆者は持ち続けたい。むしろ何も言わずに始め，遊びに内在するリズムに浸る。同時にこどもの内にあるリズムを探り，そこに歩み寄り共感していくようなあり方を模索したいのである。

そのことは本実践においてはA男の事例で見られる。A男がもっとしたかったであろう前の遊びのリズムを，筆者自身が跳ぶことによって再びつくり出した。筆者がA男により添う一つの手だてであった。そこに子ども達が加わったことによってそのリズムが見える形となって表れた。A男もそこに共感することによって参加できたと考える。

・保育実践を試みる中で子ども理解が新たにされる

a保育者は，A男が遊びには参加しているが心底楽しんでいるとは捉えていなかった。これがはじめのA男理解である。そして，もっとしたかったとぐずるA男の姿に戸惑った。A男は展開していく遊びの場の中に居たゆえ，前の遊びの方が居心地がよかったと気づいたのであろう。そのことは，前の遊びを再現することによって明らかになった。保育者はA男のそのような状態を見ながらも皆に向けての保育実践を試みた。その中でA男が気持ちを替えていく過程があった。ここで新たなA男理解が生じたのである。

D子はプレイクロスを手にして握り込んでいた。筆者は繰り返し歌いながらプレイクロスを握っては弛める，ということをしていた。そこで，同じようにしていた母親に倣い，D子は合わせた手を弛めるということを体験した。弛めることを知ったD子は母親と同じ身体感覚を体験したと考えられる。これも保育実践の中で得られた子ども理解である。

一方，B子へは関わる糸口を見出せなかった。母親より本保育実践への参加の感想を伺い，その思いを理解することはあったものの，B子自身がどのように感じ捉えているのか，筆者にはわからないままである。B子のために試みた保育実践は乏しく，筆者はB子を十分に理解できずに終わっている。

・「一人ひとり」と「みんな」を尊重する

本実践において個性的な子どもの姿があった。シールを貼り続けるE男であったが，それが固執した姿なのか，幼い時期に現れる集中の姿なのか，容易に断定するのでなく，貼り続けカズーに仕上げて満足したE男の取り組みを尊重しあう場となっていた。そこでは同時にカズーで声遊びをする子ども達の活動も尊重されていた。

・語りを聞く

保育後の保護者懇談会，保育者懇談会での語りは，保育の場面の出来事を読み解く助けとなった。語るということは個人の考えであったことを皆に向けて発信し，共に意味を見出していく作業のはじまりであったと考える。語る場をつくること，聞きあえる場をつくる努力が求められる。

以上，5つの視点を提示したい。

おわりに

本実践はK園の日々の保育実践の積み重ねの上にあることを改めて記したい。「共に育つ保育」を目指して具体的に考え，実践し，検証することを繰り返しているのである。そのような保育をつくり出そうとする施設長と保育者の方々の誠意ある働きに敬意を表したい。

註

カズー：アフリカに起源のある膜鳴楽器の一種で，元は管の一部に羊皮紙を張り，口に咥えながら声を出し振動させて演奏する。声を変質させるところに特徴がある。

〈引用参考文献〉

(1) 永倉みゆき「保育を『見る』行為に関する一考察（その2）―保育者はどのように『見る』のか」『保育の実践と研究』11-2.2006.p.26
(2) 宇田川久美子「自閉傾向のある子どもとのコミュニケーション的場を広げる―'真似ること'の役割とその意義」『保育学研究』43-1.2005. pp.27～38
(3) 宇田川久美子「保育における子ども理解―自閉傾向のある子どもとのかかわりを通して―」『子ども教育研究』1.2009.pp.2-11
(4) 拙著『わらべうたを用いた障害児保育の実践』三学出版2011.の第4章において，4事例を挙げている。
(5) 拙稿「共感を取り戻そうとした保育実践の考察―音楽遊びにおける軽度の障害のあるE児の事例をとおして―」『龍谷論集』478.2011.pp.126-146

キーワード　障害児保育実践　手だて　リズムの共感